



平家物語圖會 後編 五

^ 13
2693
11



18
2693
11



平家物語圖會卷之十一

目錄

- 讃州八島の軍義經武功景清水尾朝引義經誤と弓を流と
- 攝州渡邊ゆと義經梶原景時逆槽争論の圖
- 佐藤嗣信義経を拘と立塞能登殿の箭射落さるる圖
- 伊勢三郎智計教能を降と壇浦船軍平家滅亡
- 那須與一宗高扇を射切圖
- 豊前國門司関長門國壇浦ゆと平家の面々入水の圖
- 梶原義経言録舎殿義経を勘氣せらる平宗盛公父子梟首

大臣殿以下大路を引渡さるる圖

以上

平家物語圖會卷之十一目錄終



平家物語圖會卷之十一

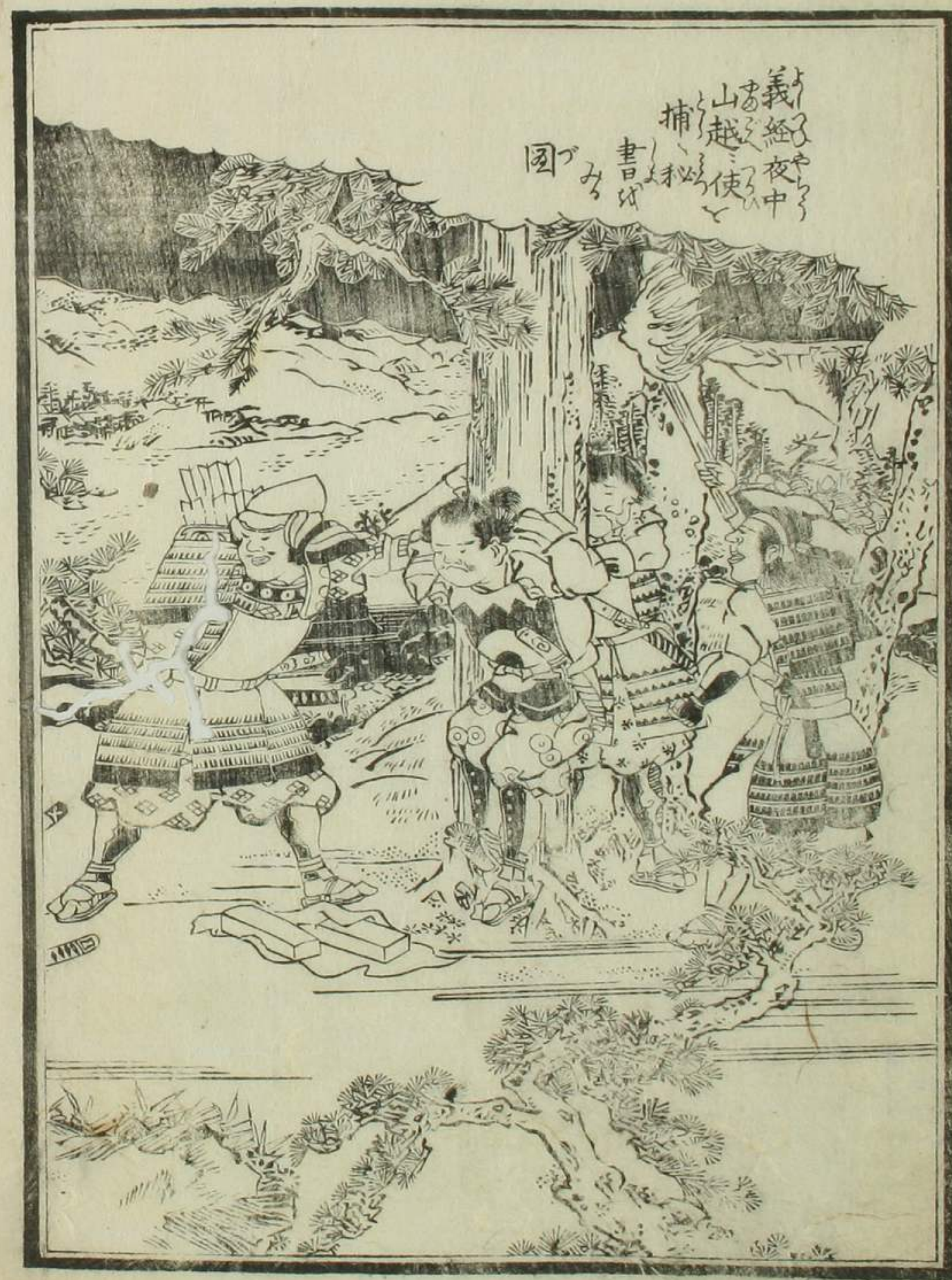
東武 高井蘭山翁述

續列八島の軍義経武功景清水尾朝曳義経誤る弓と流さ

元暦二年正月十日九郎大夫判官義経院泰... 大藏卿泰経朝臣を以て奏聞... 今平家神人ぬん放さ直西海波上の落人... 此三年が間責亡... 困を塞げ... 今度義経雲水の果と盡し... 平氏跡... 王城へ... 旨を... 法皇御感... 猶其旨院宣... 東園の堵士... 合せ陸の豹の蹄の通ん限海へ... 立ん... 果さん条少も子細を存せん... 直帰園... 八条の隙行駒の足疾く憂き月日を送り迎既... 成ふ... 東園より数万騎荒れ攻下るの鎮西より押寄ると度... 浮説る... 耳...



下家物語圖會卷之十一



下家物語圖會卷之十一

と申の判官笑と色代ちを宣ふ。一定勝浦の。下鴈の唱安きやうと申せ。字の書ハ勝浦の。判官悦びあは。給へ殿曹。軍に向ふ義経が勝浦の。目か度さ。の。此の平家の後夫射の。仁の推う。と宣ふ。阿波民部重能が。弟。櫻間。能遠とくひと申。ゆ。近藤六が勢の内馬八勝と二十騎。計。我勢小具せ。能遠が城の押寄攻め。防戦ひ。良馬持。打。乗。逃行。防矢射。者。二十餘人。首斬。軍神。祭悦の。首途能と悦と。又近藤六を石八島の。平家の勢何程。と。判官何。加根四。五十騎百騎。差置。上阿波民部重能の嫡子。田内左衛門教能。伊予の河野四郎を攻んと。三十餘騎を卒。伊予。判官。能ひ。八島の。程。二日。敵の。阿波。大坂。越。云。山。竟宵。敵。と。

道。文持。秀男。入。行。連。夜。敵。方。御。方。の。八。島。打。解。物。語。を。仕。判。官。我。も。八。島。へ。行。夜。道。先。達。其。文。何。方。何。地。宣。是。都。女。房。の。八。島。の。大。臣。殿。へ。何。事。有。宣。別。の。子。細。源。氏。と。定。河。尻。小。定。そ。告。判。官。其。文。奪。持。秀。文。を。奪。取。せ。奴。搦。罪。作。頭。斬。と。山。中。の。樹。の。楳。付。置。せ。被。文。を。え。九。郎。の。進。疾。男。大。波。大。風。を。嫌。と。寄。せ。能。用。心。せ。給。と。書。判。官。是。の。義。経。天。の。輿。文。鎌。倉。殿。に。送。り。と。深。く。収。十八。日。寅。の。刺。讀。岐。の。引。田。着。白。鳥。丹。生。屋。を。越。八。島。へ。寄。判。官。又。親。家。を。召。尋。朝。干。陸。と。嶋。の。間。馬。の。太。腹。を。潰。ら。と。高。松。の。在。家。火。を。掛。ら。八。島。田。内。左。衛。門。教。能。伊。予。の。河。野。を。攻。討。し。れ。

平家物語繪巻卷之十一

一軍一更かゝと宣ふ。兼平いと越中次郎盛盛を先とて。都合五百餘人。小船に乗焼拂ふ。物惣門の前の汀に押寄。陣を八判官も八十餘騎。鼓吹寄て。整ふ。盛盛の屋形は立む大音の抑以前名乗多む。海上通ふ。假し。名分明ち。今日源氏の大將軍に誰人。伊勢三郎進む。高ら。清和天皇十代の後胤鎌倉殿の弟。夫判官殿ぞ。盛盛頃。去る。平治の合戦。父討と孤り。鞍馬の兒と。後。金商人の家来と。糶料背負と。奥列へ落下す。小冠者め。舌。美盛。寄舌の柔。儘傍若無人。雜言を吐ふ。左の足下。北園砥波山の軍。幸死命を助。北陸道。呻吟。食。く。上。其。某君の。恩。飽。何。食。足。下。伊勢。園。鹿。山。ゆ。山。賊。妻子を育。知。時。金子家忠馬。馳。誰。古。戦。唐。我。人。虚。言。過。言。誰。劣。死。春。一。谷。

武藏相模の若殿曹の。並。入。せ。ん。と。い。け。る。傍。一。二。束。三。伏。能。登。放。て。盛。積。の。月。板。の。事。と。裏。撥。扱。み。そ。詞。戦。の。能。登。殿。軍。六。様。の。の。ぞ。と。直。直。着。唐。卷。保。の。小。袖。唐。卷。威。の。還。着。物。作。の。太。刀。を。帶。玉。城。一。の。若。弓。此。殿。の。夫。先。の。現。る。者。主。の。例。の。源。氏。の。大。將。唯。一。矢。の。射。落。と。と。想。と。源。氏。方。の。も。の。究。竟。の。面。大。將。の。矢。回。の。馬。の。頭。を。立。双。掛。塞。と。其。除。の。矢。回。の。雜。士。曹。と。散。射。の。ゆ。急。強。武。者。十。騎。計。射。落。中。の。も。真。先。の。佐。藤。三。郎。去。滿。爾。信。の。肩。の。り。馬。の。腹。射。技。馬。の。り。と。落。能。登。殿。の。童。菊。王。丸。大。が。剛。乃。者。の。崩。黃。威。の。腹。卷。の。二。枚。兜。の。堵。を。箱。打。物。の。室。を。外。爾。信。多。音。を。佐。藤。忠。信。弓。矢。番。と。兵。と。射。菊。王。草。摺。の。廻。を。看。ぬ。と。大。居。の。例。の。能。登。左。の。右。の。の。菊。王。丸。を。摺。の。船。の。り。と。擧。

八多。痛ひゆと聞もり失ぬの。越前通盛卿は仕討と多ひ。後能登殿の
屬に十八の若者。能登殿哀れ其後ハ軍も仕多り。判官ハ嗣信を陣の後
か昇入を馬より下とみをたれ。覺ゆると宣ふ。今ハつこそ。判官思置
あらと宣ふ。何らうい。唯君の御代ハ渡せらんを。こぞ。死ハ公歟とめり。
箭取の敵ハ射らう。期する。処就中源平の合戦ハ奥列の佐藤嗣信と云首
讀列ハ島の磯ハ主の命ハ代で討と。千歳の末も皆ハ侍ららん。今
生の面目冥途の心ハおふいと。弱ハ弱る。判官益々武士と云も。餘りハ哀れハ
禮の神を禱ハ當声を咽ぐ泣とけ。尊き僧を尋せ。會員の定期ゆく
の一日経書と訪ひ多れと。大夫黒と云。馬ハ好鞍置と此僧ハ賜け。此馬ハ
献を落せ。小乗と五位尉ハ。一時此馬も五位ハ。大夫黒と。此馬ハ
弟忠信と始るとを。侍を。皆侯を流し。此君の命ハ失入。露塵程も。

惜々トとやける。去程ハ阿波讀岐ハ源氏と侍々侍。十四五騎ハ騎打列く
出ま。二百餘騎ハ成ける。日ハ晩ト。源平互ハ引退く。此ハ奥より尋常
小飾ハ小船一艘。備より七八段遠。漕寄。船ハ横さる。あはれ。ふと。牙ハ
齡十九九井の女房。柳の五。數紅の袴着。松屋形より。立出。日の丸の扇を松の
背峽ハ袂立陸。向と拍きける。判官後藤。藤多。舟を。向と。射と。か
の。大將。夫。面。進。傾。城。を。見。止。無。射。落。射。落。せ。る。其。覺
の。射。せ。然。と。や。け。御。方。の。射。仁。推。多。向。多。其。覺
後。と。着。軍。の。向。合。合。内。別。下。野。國。の。住。人。那。須。太。郎。資。高。向。が
子。與。二。宗。高。小。兵。多。子。利。判。官。登。抱。あり。と。さ。の。掛。鳥。と。争。ふ
の。二。ツ。ハ。射。落。し。あ。と。と。と。一。を。百。の。二十。歳。計。の。若。冠。之。黃。里
赤。地。の。錦。を。以。士。社。新。直。垂。の。黃。威。の。鎧。着。足。白。の。太。刀。を。帶。朝。次



正家物語圖會卷之二十一

借も源氏の兵共昨日根津河邊邊福島をかき大風大波小湊と目眩せ
 せ昨日阿波國勝浦に着て其夜軍一終夜山を越今日又早旦より戦ひ暮
 し二日之間寝ざるゆゑ人馬及疲乏或は兜腹を枕り前後も知れぬ
 其中小判官の高き芥打上り方敵より夜討さるや遠見しすの間も寝給
 せ伊勢三郎八幡如小隠と居て敵寄先馬の太腹を射んと待構へども
 聊臥せり義経の軍慮忍しく油断の事と捕討者木曾義仲良
 足の爪端も並びざるのち後代比とて入捕判官橘正成の平家能
 殿大將ゆゑ夜討の支度せしむ運の尽ぬ時節とて越中次郎兼海
 老名次郎先陣の争ひ仕出空しく夜も明ぬるり寄んぬ衆以義経
 盛公のうとも大勢狼唄し寄り勝利必定あるか明方小平家
 當國志渡浦(漕貝)判官八十餘騎追とぞ蒐らと平家小勢の源氏と

龍んとする如八島め残り二百餘騎追と續きたるゆゑ源氏の數十方
 騎跡なきと恐る船め九乗廻る程何地と指所もなく海と行ふ悲
 げは四國八判官の攻落さ九列入らば唯中有の衆生と入り判官ハ
 志渡浦の下居と頸た実檢し伊勢三郎を召阿波民部重能が嫡子
 田内左衛門教能伊与の河野四郎を攻んとす平餘騎ゆと行つ河野と
 討伐し所従の首た斬八島(森)をさるが教能今日見(着)と使(行)て拵へ
 せると宣ふ美盛兼と白旗流を押し勢十六騎皆白旗束ぬ出弛向
 ひ端々行遇交二町斗隔赤旗白旗打立たり美盛使者を教能が拵へ
 中根是九郎大夫判官の御内伊勢三郎美盛軍を召ぬ非(物)具是
 弓箭も帯しゆ大將ゆとと向ふり兩と入させぬとす平餘
 騎病も通せぬ伊勢三郎田内左衛門打双と拵安多(物)具是

合と定めけり。据原進と云。今日の先陣ハ景時ハ賜ひけり。判官義経ハ無事と
 と宣ハ据原まささるるハ殿ハ大将軍中ハ第一の者と申す。判官と云ハ
 とも。鎌倉殿ハ大將軍。義経ハ軍奉行と兼つる身。且ハ和歌會と同
 とも宣ひける。据原先陣を所望仕り。天性此殿ハ侍の主。成りてこそは
 空けり。判官和殿ハ日本の嗚呼の者哉と云。太刀の柄のみを掛るハ据原
 鎌倉殿より外の主を不持ぬ者とも同く力の柄のみを掛ける。既ハ同士對せん
 と云。嫡子源太景季。次男平次景高。同三郎景茂。親子主後十四五人打物室
 を外ハ父と不寄合。判官の氣色をたまはる。伊勢三郎義盛。佐藤四郎
 兵衛忠信。江田源三。廣元。熊井太郎忠元。武藏坊弁慶。と一騎當千の面ハ据
 原ハ中ハ五管。我對んと若寄ける。さとも判官ハ浦久取付。据原ハ土肥
 次郎。細川。兩人ハ之を摩くゆける。是程のハ大事を前ハ抱る。同土軍仕
 ぬ

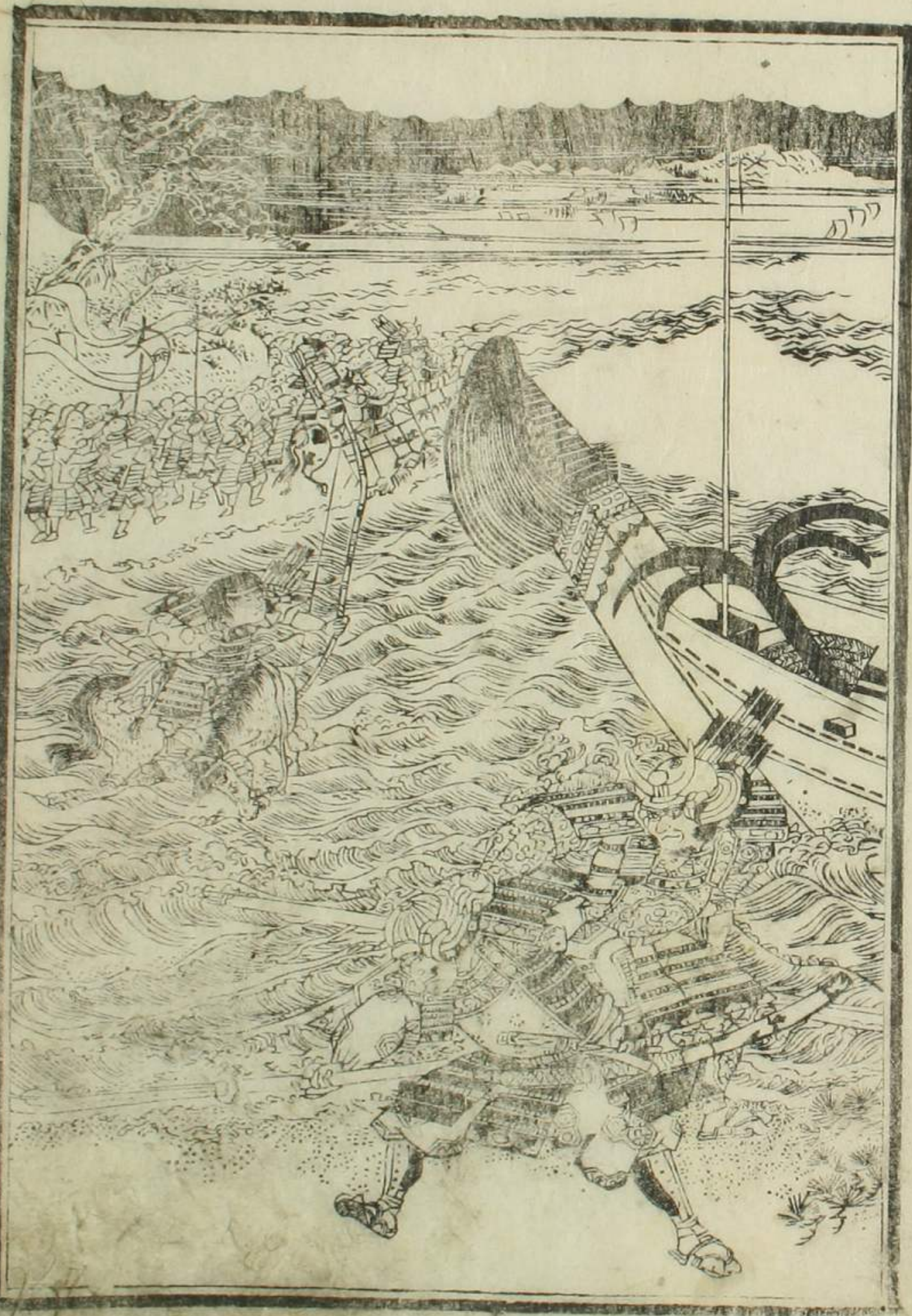
平家ハ勢付けり。且ハ鎌倉殿の面ハ若く召んぬ。穩便る。と云けり。
 判官定りぬ。据原進む及ぞ。洋船と先陣との意恨より。換言して終ハ
 失ひまり。と後ハ云へ。玄程ハ源平兩陣の父。海面終三餘町を隔。門
 司赤岡壇浦ハ漲く。落る朝。平家の舟を心する。朝ハ向く。推落。源
 氏の松を自ら朝を追く。來る。澳ハ朝早。且ハ付。据原敵の松の行
 遠ハを。熊ハみ。引寄。乘移く。親子主後十四五人。打物と云。艦船敵
 難廻り。分捕餘。其日の。同名。二の筆。附ける。却。說。兩陣。周。作。海
 上。夷。響。梵。天帝。釈。堅。牢。地。神。も。敬。篤。き。の。う。ん。と。新。中。納。言。知。盛
 卿。船。の。屋。形。ハ。進。出。大。音。ハ。名。將。勇。士。も。運。送。ぬ。及。力。及。ぞ。此。名。を。そ
 惜。け。軍。能。一。東。國。の。者。ハ。弱。氣。足。わ。ほ。の。と。宣。云。飛。彈
 三郎左衛門景経。兼。是。下。知。を。傳。ハ。西。七。多。壽。景。清。進。出。之。坂。東

三ノ人物 吾國 卷之二十一

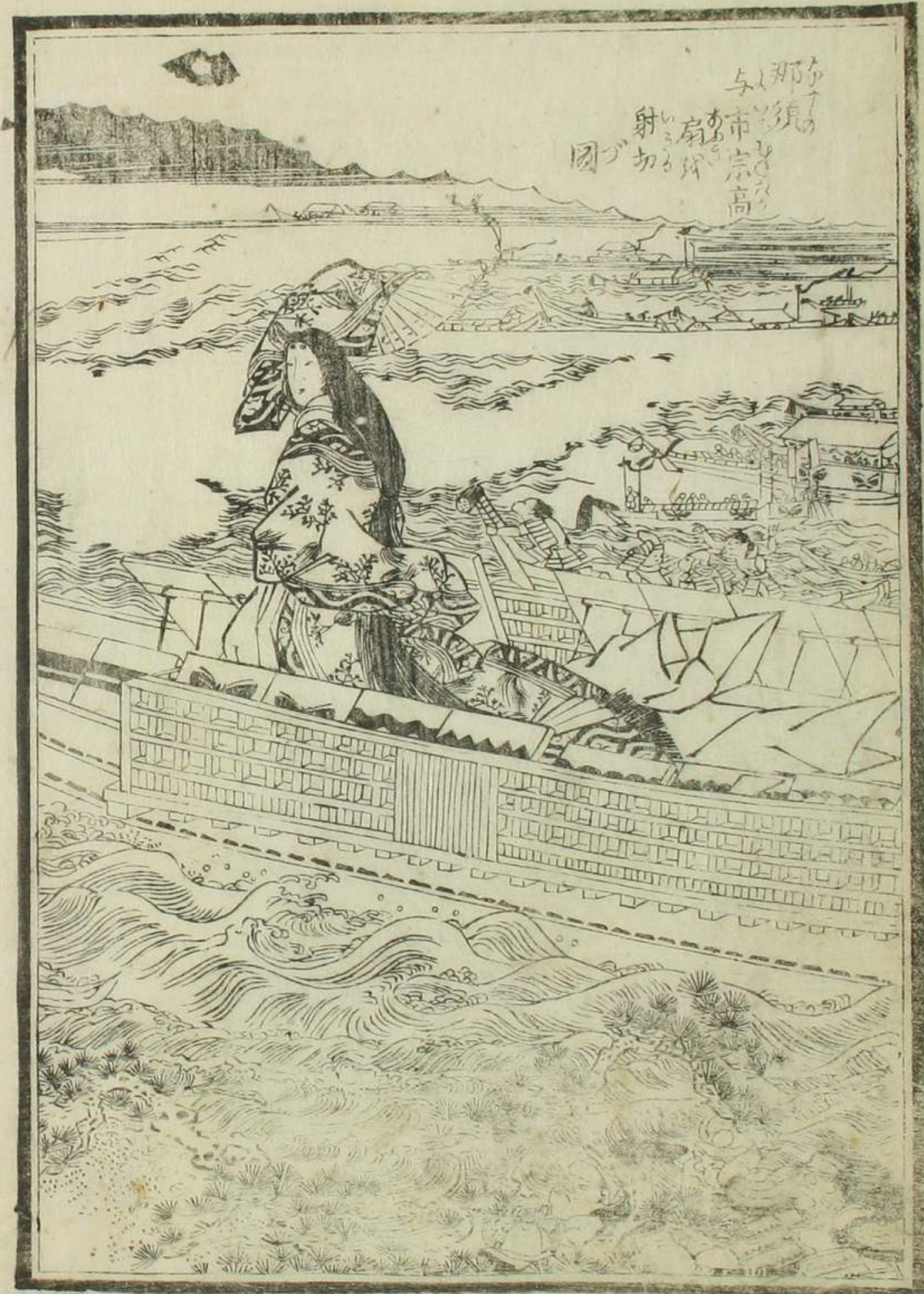
十四

武者八馬の上吹口も利ん船軍も始とらん魚の木の上で居る地を
 一と捉へ海へ漬んと申け。越中次郎多麻理進出。同とらん大将九郎と組
 の小き色白く。當門齒の少く差を眼楯小似く。知を男あるが。直直
 度と着替と。元分難くん様めさる。悪七多麻理重ね。其小守者も猛く
 何条のあらん。片腕の狭く海へ入ん物をと踊け。知盛卿小船ぬと大臣殿の
 前に至り。阿波民部重能が様子。を替せと管の首を刎んと申下。大
 臣殿さへ奉公の者ある。さうも申す。お手ある。とて。重能を召れ
 と心音とせ。今日ハ悪うも。四圍の者たぬ軍能せと下知せ。臆せ
 と宣。何条臆い。御前を立知盛卿ハ太刀の柄碎る。極哀首打
 落さんと。大臣殿小眼配頻めせ。小敵のたれ。力及む。止あり。借平
 十餘艘の松を二つ小作。山賀兵藤次秀遠。五百餘艘先陣ぬ。松浦

三百艘二陣。公遠二百餘艘三陣と定む。中や兵藤次ハ九忍一の強弓ぬ。勢云五
 百人勝と。船の艦舳ぬ。双々五百の矢を二度の放り。源氏ハ三千餘艘と。精兵ヨ
 ろらん。其奴斯野より射とめ。おと。利有とも。と。大將判官真
 先ぬ進んで戦れけ。さんぐ。小射と。和田小太郎義盛ハ精多の。番
 と。遠矢三町の内外。強う射ける。別くと。遠く射。う。其夫賜
 と招き。知盛卿其夫を。鶴の本白鵠の羽と割作の矢十三束。三伏。ける
 小。和田小太郎義盛と書。良。此矢を射。二町餘を射。度
 合と和田我程の遠矢と。辱。矢止。と。朝。義盛安。後
 小。小。平家の勢と。引。射。軍。射
 殺。時。小。白。大。判。官。殿。の。松。の。筋。小。箇。大。射



三
家
の
語
圖
分
示



那須
市宗高
射切
團

三
家
の
語
圖
會
卷
之
十

空のり。其夫賜らんと招きたり。夫と被せぬ。白笠山雉の尾を以て作
 十四束三伏。伊予國の住人仁井紀四郎親清と。漆印と書付たり。前和
 田を射返し。此精多。判官後藤実基を召。御方小推。此夫と射返せ。其
 甲斐源氏浅利與一殿。あそと。さく。與一を召。奥の方より。此箭を射。

矢を賜ると。のり。必刃を招く。其を射返せ。宜ふ。與一其夫と射。

是ハ。弱く。夫束も短く。同。其。具足。仕。

作。大の。我。大。推。十五束。三。伏。

け。不。打。番。皆。保。切。と。放。て。

が。真。中。と。ま。づ。と。射。中。船。底。を。倒。

義。定。ハ。精。之。の。利。二。町。を。向。

於。押。並。互。亦。回。も。振。む。戦。

源氏今日の軍ので。あんと危。白雲と。虚空の。

け。が。雲。の。ち。ま。ち。白。旗。一。流。舞。下。

ぞ。ま。ち。け。判。官。は。八。幡。の。現。

多。六。諸。軍。皆。か。く。と。拜。せ。

が。強。弓。を。射。究。密。示。一。合。

旗。ハ。離。と。落。る。

一。足。も。引。ぶ。

大。臣。殿。小。博。士。暗。信。を。召。

権。急。度。勘。中。と。宣。

御。方。危。あ。と。中。も。果。ぬ。

阿。波。民。部。少。輔。重。能。ハ。此。三。平。

三平の物語

左衛門生捕ふせと。今ハ叶トと。ひんかん忽々亦々源氏とひんか成新中
 納言知盛卿奴め斬と捨べり。と。後悔せと。いかにぞある。平家小と
 好武者を多松小兼雜入原を唐船小兼源氏唐船を攻バ中取龍対ん謀あり
 し。重能返忠の上唐船小目も掛む。大將軍の寶。兼多松方大軍ゆき巻
 け。今に後ひ。四國鎮西の者一時源氏小属。君小向ひ主小向と対し。る
 源氏のまどを平家の松小兼程。水主揖を切伏射殺と放船底小倒伏と。松を
 直ま及む。知盛卿小船め。御所の御船。泰。今ハ叶つて。苦。了物。松
 海入船の掃除め。正。と。艦船走廻。みづうも掃清め。女房。向ひ
 今珍。吾妻男小見。あんと宜。あ。皆。位伏多。二。位殿。豫。え悟。良
 心。鈍色の二衣打。練袴の傍高。く。神璽を腰。小。控。宝劍を腰。小。捺。主上を抱。死
 進。我ハ女。あり。と。敵の。み。掛。る。主上の。小。供。小。事。志。あ。く。續。多。と。松。小

立。か。主上八歳。小。容。嚴。く。傍も照輝。く。并。御。髪。黒。く。必。背。る。と。せ。の。今。と
 忙。然。の。小。形。勢。め。我。を。何。地。具。一。行。ぞ。と。仰。ま。二。位。の。尾。前。先。世。十。善。戒。行
 小。依。く。萬。衆。の。主。と。生。と。と。多。と。と。小。運。今。そ。多。小。ぬ。東。小。向。ひ。伊。勢。石。清。水。小
 暇。ゆ。せ。の。小。西。小。向。ひ。西。方。淨。土。の。來。迎。を。願。せ。多。小。念。佛。を。へ。此。國。八。穢。土。と。そ
 物。憂。境。の。波。の。下。め。そ。極。樂。淨。土。と。や。愛。度。都。の。具。一。進。と。と。種
 種。慰。め。ま。り。う。山。鳩。色。の。御。衣。小。鬘。結。せ。多。小。涙。を。愛。ら。く。を。合。せ。
 細。き。声。小。涙。小。星。と。と。先。東。小。向。ひ。伊。勢。太。神。宮。正。八。幡。小。暇。之。多。小。其。後
 西。小。向。せ。多。小。念。佛。を。う。二。位。殿。船。小。立。上。眼。を。南。無。西。方。の。教。主。萬。衆。君
 を。救。ひ。せ。と。松

今ぞある。伊。勢。河。津。の。流。る。波。乃。底。ぬ。都。あ。や。成
 と。詠。く。岸。波。と。千。尋。の。底。小。陷。多。小。悲。哉。無。常。の。春。風。蒼。と。も。ち。花。の。小。空。を

散。痛しひか分断の荒波。王體を沈果ぬ。女院是をこゝの硯硯燈石左右の
 懐の杖を海へ飛入せぬ。渡辺源吾右馬允。小船をつと僧寄。髪を熊も
 ぬき引揚奉る。大納言典侍局。車後御の。あね浅様。正女院ゆく渡せぬ。
 過仕。まてやこれと。判官ゆと急ぎ御所の松(遷)なる。叔大納言典
 侍の内侍所の唐櫃をよと。海へ入るとひける。袴の裾を松射射と。源
 ひ倒るぬ。武士たぬ田も。其後唐櫃の鎖を握切ぬ。蓋を削んと。六忍ち
 目眩。岷垂平大納言時忠。御此時。既生捕せんと。坐し。あ且内侍所ゆ。九
 夫をきと。叶ぬと。宜。兵名を振と。恐。其後判官時忠。御あ
 合せ。元の如く。滅納。門。平中納言教盛。御。参。茂。修理大夫。經盛。兄。知。の
 を取組。鎧の上。鎖を肩。所。海へ入ぬ。大臣。殿。父子。斯も。仕。船。立。四方
 と。坐し。坐し。平家の侍。と。餘。公。憂。傍。と。ま。り。通。松。と。先。大臣

殿を海へ岸波と。穴入。是をこゝ右。藩門。督。續。飛入ぬ。人。の。鎧。の上。の
 重き物。肩。抱。入。と。入。と。入。と。沈。ぬ。此。人。親。子。と。左。上。の。愁。水。練
 の。上。の。大。臣。殿。子。息。沈。ぬ。我。も。沈。ぬ。助。く。と。助。ら。ん。と。互。目
 を。こ。通。被。方。此。方。泳。ぬ。伊。勢。三。郎。小。船。漕。寄。先。右。藩。門。督。を。熊
 子。引。上。と。大。臣。殿。猶。も。沈。ぬ。と。二。牙。の。上。り。乳。母。子。の。飛。彈。三
 郎。左。藩。門。景。經。え。奉。つ。と。小。船。の。乗。と。義。盛。が。松。の。押。双。兼。利。義。盛。二。対。と。切。と
 ぬ。受。盛。が。童。中。の。隔。り。二。郎。左。藩。門。と。太。刀。打。け。る。が。曾。の。真。額。切。割。と。二。の。太
 刀。の。頸。打。落。と。受。盛。危。き。か。隣。の。松。より。堀。弥。太。郎。親。経。が。射。る。矢。ぬ。三。郎。左
 藩。門。内。胃。を。射。さ。疼。知。を。堀。親。経。受。盛。が。松。の。乗。利。と。郎。亦。も。續。ま。り。三。郎。左。藩
 門。を。討。と。首。を。大。臣。殿。乳。母。子。が。眼。前。め。く。と。成。り。く。と。能。登。守。教。經
 を。今。日。と。最。期。と。悟。し。赤。地。の。錦。の。直。垂。唐。綾。威。の。鎧。着。と。鉄。形。打。と。首。鎧。の

緒を締つ物作の太刀を帯。廿四差の房截生の矢貫村邊藤の弓持と朝より多く
敵と悩め。矢種盡けしに黒漆の大大刀と白柄の大長刀を左右に持。えく小難
廻りぬ。新中納言知盛卿能登殿の并使者を立と最早罪作を召入りすと
やう。能登殿さへ判官の組と海へ伴んとく走廻りぬ。是も知物具能の
若やと花と蒐らど。判官も兎角入遠と。組と用ひぬ。いづのうと。判官
の組の乗當。目ぎと花と。判官叶と長刀を引ひの服の披ぬ。必方の組の二
丈も退らふ。海と花と。能登殿の死と叶と。今と定めぬ。太刀長刀
も海へ放下し。胃も脱棄甲の下散り撥合。胴斗着と大童大母を播げ。舟の屋
形も立か大音。推うある教経の組生捕せぬ。鎌倉へ下右衛門佐の物言んと。いづ
ふれやくと。寄付者ある処。土佐國の住人。安藝の郷を知行しぬ。
安藝の大領實康の子。安藝太郎実光と。二十一人力の岡の者。我の弟ぬ

郎等一人具し。弟次郎も並力勝るま。三人寄合。長十丈の鬼ありとも。三人の
と組んぬ。頃へる。能登殿先。真前の進んぬ。安藝が郎。小の裾を合せ。海へ
一画の打と。能登殿先。真前の進んぬ。安藝が郎。小の裾を合せ。海へ
入安藝太郎同次郎。左右の服の撥一縮と。四の山の供せと。生年二十六の
と海へつと入ぬ。新中納言と。能登殿の正へ。唯今自害せんぞと。乳女子の
伊賀平内左衛門尉家長を。日米の契約違や。家長仰ぬ。能登殿と。
知盛卿の鎧二領を着せ。我身も二領着と。いづの組と。海へ入ぬ。これ
死と。當座ぬ在る。二十餘人の侍を。海へ沈まける。其中の越中次郎多麻呂。能
五郎多麻呂。悪七多麻呂。飛彈四郎多麻呂。の。此場を道と。其行滞りぬ。
梶原説言。鎌倉殿義経を。勘氣せぬ。平宗盛公。父子梶原
赤旗赤効。切引裂る。いづくとも。海へ落と。紅の浪起。主の船を。引く

陶と行ぬ生捕り前内大臣宗盛公。平大納言時忠卿。右衛門督清宗内藏頭
信基。賀岐中将時実。大臣殿八歳の若君。各部少捕雅明。僧少二位僧都尊親法
勝寺執行能圓。中納言律師仲快。經誦坊阿闍梨融圓。侍少源大夫判官李貞
攝津判官盛澄。藤内左衛門尉信康。橘内左衛門尉季康。阿波民部少捕重能。父
子以上二十八人。菊池次郎高直。原田大夫種直。軍以前曾を脱く降参を女房
庭の女院北政所。藤御方。大納言典侍殿帥典侍殿治部卿局以下。以上四十二人
とぞ又し。元暦二年三月の末のころ。年月也。一人海底小沈多。百官波浪小浮。ひ
國母官女の猛士勇夫のち小隨ひ臣下卿相の數方の軍旅小擒。止旧里小歸。耻辱
を千歳小残さく。と古往竹のさる。今来又憂べく。四月三日判官義経源八兵衛
廣綱を以て。院の御牙(奏)聞せられ。四月廿四日卯刻。豊前國田浦門司関長門國
壇浦赤間関也。平家を悉く攻亡し。内侍所壘の御箱事故る。都へ皈入

奏聞せよ。奏聞せよ。このけし。は皇大の御感も。廣綱を御壘の内へ召と。
合戦の次第妻し。御尋も。御感の餘。廣綱を當座小左衛門のぞき。後。
同日北面の藤判官信盛を召と。神壘内侍所一定。歸入せ。えと。ま。とて。
西園へ遣さ。信盛院の心馬拾つ。宿牙も。歸ら。鞭を揚西をさ。と。池下。判官
を平氏男女の生捕を具し。同十四日播。明石浦。小着。と。ける。が。深行。小月。清
上。秋の空。ゆも。劣。女房。達。一。年。の。成。通。り。小。あ。る。と。を。心。が。う。り。の。成。
と。心。び。ね。小。泣。れ。る。所。帥。典。侍。殿。熟。く。月。を。眺。む。ひ。と。と。悲。し。く。真。愛。の。心。小。
せ。ま。り。け。し。涙。小。床。も。浮。む。り。ゆ。と。斯。ぞ。心。ひ。つ。け。る。
さ。む。し。不。ぬ。く。は。小。ち。り。り。月。よ。を。井。の。抱。慈。せ。し。
治部卿局

雲の上よりよかたをぬ月影のまむつけも物ぞうら



豊前國門司を異
長門國檀の
浦の
平家の面々
入水の
國

願ひ年来志を蒙りて大臣殿の宛期に車仕りしと申す。判官下屬の
奇特の志とて赦しける尋常の装束に懐より遺繩を附香俵のて行
先之ぬと牛の行の仕せし。泣きき通る所は法皇六條東洞院の御車立
獻覽おとす。供奉の公卿殿上人の車立立双立。ゆゑ法皇の身近う石は多
し。公卿弱う今更哀れ召る。日来のつらなる者もあの人々の目もも詞の示
ぬ敷らなと悲ひし。今日かかふべし。推しひし。一年宗盛公内大臣
お成悦のわし。時公卿は花山院中納言兼雅卿を始十二人扈從し。車は續
殿上人を藏入頭親宗を始十六人前駈し。中納言四人三位中将三人は皆羅の裝束
綺羅美麗なり。皆人たる所。今日跡つゞく。虜二十餘人の侍は皆白き直
垂ゆ。鞍の前輪は益村と渡さける。六條を東へ河原を渡り引返り判官の宿
所六條堀川に居て緊く守護と大臣殿の物進せとも。曾あつて著る。

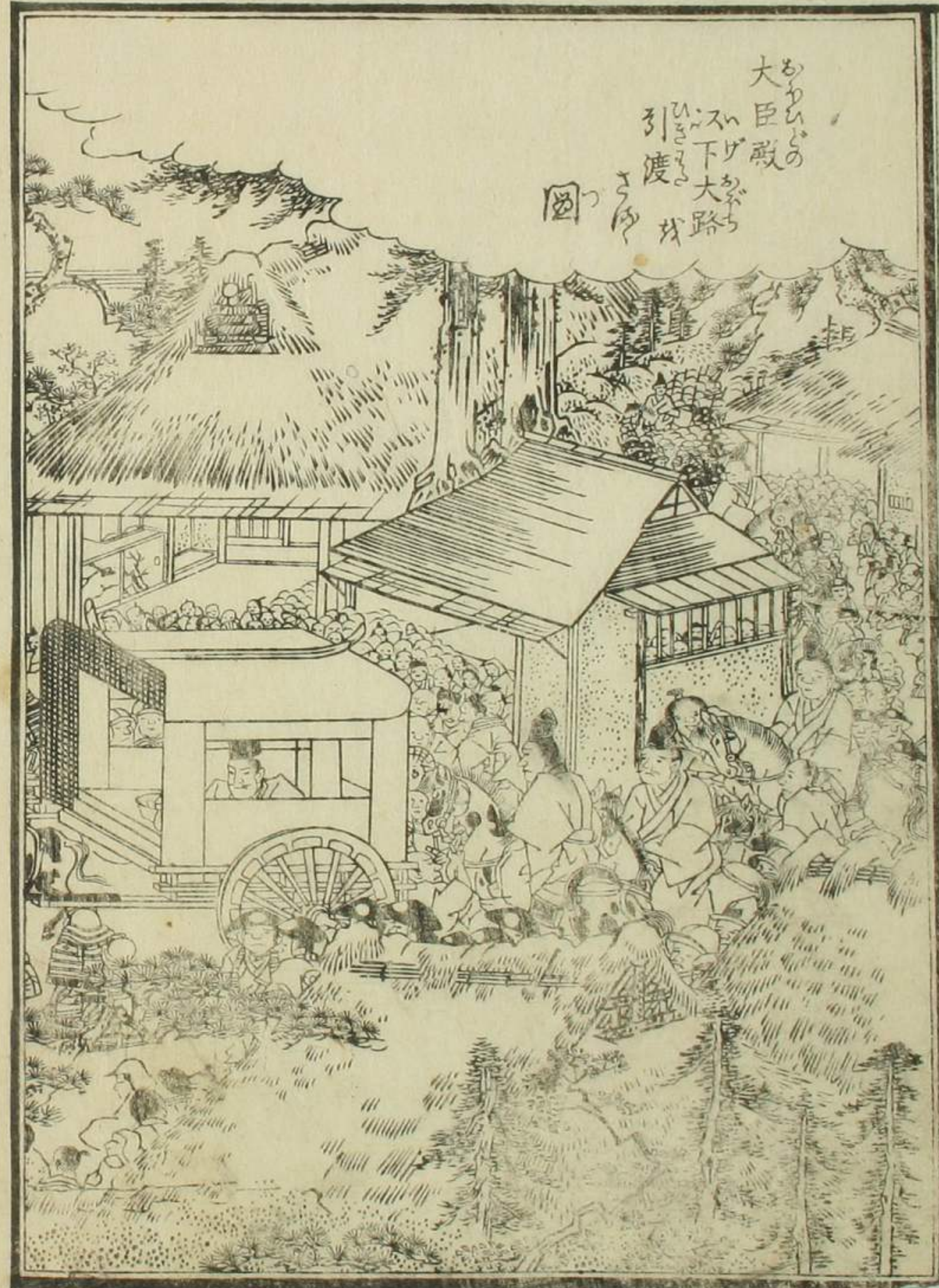
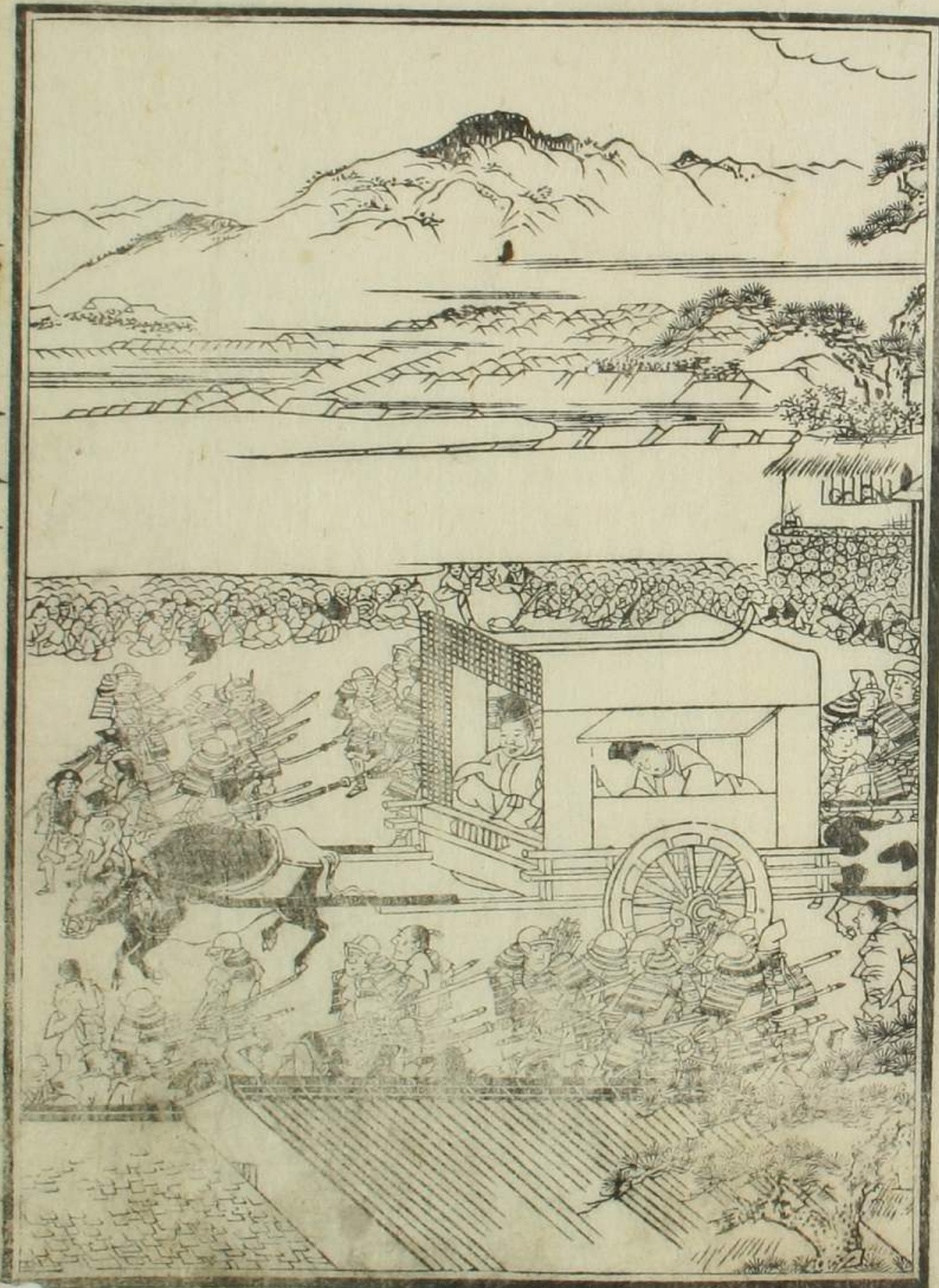
夜も寝束束寝がらぬ。袖片敷く臥ひける。公清宗の浄衣の袖を打着せ
る。守護の武士たえ。哀れ高きも賤きも思愛の道程悲なる。浄衣の
袖何程の御さるんせめとの志は深き。皆涙を拭ひ多。平大納言父子も近
小番を附置し。息讀中將時実を招き散らさし。き文を合判官に
ぬ是を鎌倉源二位にせ。人も多く損。我身も助る道あり。つとせんとや。中
將兼つと九郎の猛き丈夫あ。女房あ。打堪歎く。いふ。公清宗の
の姫達もく。おとす。公清宗の所遣と親しと。後仰り。時忠卿涙を流
し。世に在。一時の娘は女御后ゆも。凡くの人に見せんと。公清宗の
中將今左様のと努め。當腹十七。成多。猶惜くと。先腹の
姫二十一。判官に給ひける。年長。多。眉目安。世の勝。心。優。判官
判官は有難く。覺へ先。河越。太郎重房が娘も。け。夫。別。の。牙。座。

先の生る瓜兄後生る瓜弟とさる并て天下を知らぬ推し知るん類す瓜兄と瓜弟
 ぞとほむすはげれどもかひぞるれ判官波二通の状を書き鎌倉の大目因幡守大
 江廣元の許へ遣るる世の腰越状と云は是に其趣の鎌倉殿の代官不儀と勅宣の
 使とて朝敵を平げ父祖の辱をも雪一上の勲賞も行くべを乞ふ外提原が虎
 口の旗言ゆぬ莫太の勲を黙止と義経犯と科を蒙り功ありと譽りて
 勲氣を蒙り空しく紅淚の沈む者の実不見と乱さむと片口のとせせり鎌
 倉へ入る極々御前參と素意を述べ思顔を拜す時骨肉同胞
 の好絶さむと。先世の業因むと不和を感じてや故亡父左馬頭殿再延も坐
 さる推し憐を垂と此悲歎を披きあらん事新とれや糸あらし義経切
 と故頭殿の孤や母の懐と和列字の教より一日片時安堵の心ひら
 かのる命を乞ふも京都の佇立るる邊土遠國の隠と栖るる一旦時を乞ふ

此度平家追討の上格も合せ木曾を誅伐。平家之攻るる巖巖石
 駿馬の策命を乞ふも顧も慢る大海の風波の難を凌身成沈んも痛も甲
 曾を就て一弓箭を業とする本意亡父祖尊灵の憤を休んと存る外は
 五位尉の任に任じて一當家の重職何事とて不知んこと今憂深く歎切
 佛神の助ゆも悲ひも愁なる言を達せんと存者社平玉宝印の裏に全野
 公の旨を認め日本國中大小の神佛を背き起精文数通書進るとして
 猶も赦るに今頼久貴殿廣太の慈悲を以て便宜を伺ひ高厚の徳を
 を廻らされ然る言を宥らば芽免み預らば積言の餘慶貴の家门の栄
 栄花を承く子孫の徳も承く我も日來の愁眉を展二期の安寧を乞ふと
 元暦二年六月五日進上因幡守殿原義経と書るる玄程の鎌倉殿の大臣殿父子
 小對面の度一隔と向ひの屋の居り。簾の中よりさかひ比企藤四郎義員

以てやうらふ抑平家を頼朝が私敵と努む存トいたれ故入道相國敵と
 とき頼朝事今日あらんこれ朝敵と成ら急ぎ追討さし高院宣
 わま王地不在と命背くゆ外も是に迎せしむるがうかたつるまのこ
 ぎとほく本意のこやとる義員此うやんとと大臣殿の御前へあり
 これを居直と跪たゆのぞ口惜き堵國の大小名多く並居る中東京の者成ら
 もわ。又平家の所従方一者もあり皆爪弾くとわね最惜あぬぬかめ
 る恥とも晒しあ居直と良のひととと今更命の助るは西國ゆくの
 ぬも成多ふ人の子を捕と口と下とゆふも理多とま入あり又猛虎深出
 在八百獸震怖隘井の中あはし尾を揺く食を索とらハ此人もうも平
 家の大将とる。運盡斯成とる昔一丸巻動も咎とと候を催ともあり
 一借判官へさぐ陳謝あは景時が幾言種とありと鎌倉殿更あ入れ

多の大臣殿父子を具へ。急ぎ上るゆ由宣ふ依と。六月九日又大臣殿父子と
 清取都へ皈り上るとと。大臣殿一日も日敷の延るあ嬉いとあはるぞ墓と
 道とらも交ゆやくとあはる。困く宿打過る尾列野河の内海と。故
 左馬頭義朝の妹せしと一房と。まぞ道と難くあつる。小そこを打過
 へと。我命助ると内公致ひる。右衛門督ハ左のれも暑き時即頭
 の損せぬ根小都近くゆと折ん計らひとあはる。父の餘歎きあふ痛
 さ小左ハやと。唯念佛の初めあり。同共三日近江國餘原の宿の音とる
 昨日迄ハ入子二所小至せ。今朝より引居る。判官公対止三日路り人を先
 立。智藏のるふと。大原の本性房甚豪と。聖を替ト下と。大原殿聖
 ぬ向ハ右衛門督ハ何困あからん。擬ハ首を刎ら。た軀へ。席臥んとあひ。よ
 生とら別と。この悲し。此十七年一日片時も離と。今度西國ゆくのゆ



三ノ目 吾國 卷之二

三ノ目 吾國 卷之二

成る。身を生捕とす。京鎌倉恥を曝も。彼由あるとく泣きけり。
 聖も哀さ限らず。子ととも公弱くて。涙推拭さ。恩愛の道。左を
 以石とめ。但し今生の栄花。一もの残る所。今又活る。目も遇
 らぬ。先世の宿業。あはれ神も恨も。百べり。大梵王宮の深禪定
 の樂。多程る。況や電光朝露の下界の命。於てを。切利天の億千歳
 唯夢のあ。三十九年を。過さぬ。短一時の間。推さ。皆死。不老不死
 の藥。推し保ん。東父西母。命。泰皇。奢を極し。驪山の塚。埋。漢武の命
 を吞し。杜陵の苔。朽れ。生ある者。必滅。釋尊。梅檀の煙。を免。あ
 ぞ。衆盡。悲來る。天人も。猶五衰の日。降。承る。器も。悪も。空。あ
 親。佛の心。叶ひ。今。餘念を。百。頻。念。仏を
 初め。せ。大臣殿も。善知識の聖。教。妄念を。離。西。向。合。掌。

高。声。念。仏。多。處。橋。右。馬。允。公。長。太。刀。を。引。側。左。の。方。り。必。後。必。廻。り。
 既。斬。んと。け。大臣。殿。念。佛。を。止。め。右。衛。門。督。も。既。斬。と。宣。ひ。る。哀。
 る。と。公。長。後。寄。と。え。頭。前。落。ゆ。公。長。平。家。相。傳。の。家。人。就。中。
 知。盛。卿。の。許。朝。夕。伺。公。の。儀。世。の。流。入。習。と。も。無。下。情。ち。ら。と。人。皆。
 悪。々。右。衛。門。督。も。先。の。ど。く。呪。也。念。仏。初。め。り。右。衛。門。督。聖。父。の。必。
 宣。期。を。い。く。や。と。宣。ひ。目。出。度。を。り。必。安。く。必。百。の。と。止。と。宣。ひ。今。の。必。
 置。と。り。さ。斬。と。頭。を。延。と。討。せ。る。尾。の。堀。弥。太。郎。親。經。斬。り。驅。公。
 長。計。の。父。子。一。穴。埋。多。大臣。殿。餘。罪。深。う。宣。ひ。た。る。依。る。同。廿。四。日。大。
 巨。殿。父。子。の。首。都。へ。入。檢。非。違。使。三。條。河。原。必。公。向。と。是。を。精。取。三。條。を。西。東。
 洞。院。と。比。渡。獄。門。の。左。の。樺。の。木。必。梟。ら。と。昔。も。二。位。以上。の。人。
 の。頭。大。路。を。渡。さ。と。先。蹤。を。定。平。治。必。信。頼。卿。の。さ。り。悪。行。人。さ。り。

く首へ削らんとすども。大路を渡さば平家も至と渡さば西國も
上りて生と六条を東へ渡され東國より歸て死と三條を西へ渡さる生との
愧死との辱の甚も劣らざりたり

按じふ大臣殿八歳の若君。武家評林其外六歳とあり。三歳ゆく初
冠の時義宗と云ふ。又梶原が諺言依る。鎌倉殿判官と不和あるを
さることもども。実み義経不敵たるゆゑを生質女も迷ひあり。西國
ゆく女院を御所の船か移し。義経同船せしとて。其れもあつ生捕り朝
敵時忠卿の女を娶る。鎌倉殿一言の相談ゆゑ及し。其外拔儘
の計ひもろし。梶原の諺言あり。不和の瑞相何程も頭上
ぬ惜むべし。名將たるは。文学足ざり代

平家物語圖會卷之十一終

